

国際交流の推進

特別活動部 阿部大輔

令和元年度を振り返ると羽後高校の課外活動において、①タイ、②マレーシア、③コンゴ民主共和国と3つの国との交流が実施された。異言語や異文化との交流を通して身の周りの価値観の再発見に繋がること、言語化することの大切さ、自分の考えを持つことの意識など国際感覚やキャリア観の養成にも繋がっている。それぞれの国との関わりについてまとめ、今後に繋げたいと思う。

1. タイとの交流

昨年に引き続き、タイと縁のある年になった。今年度、タイと関わった機会は、(1) タイ研修、(2) 羽後町留学、(3) うごえいごの3つの機会があった。それぞれについて報告する。



(1) タイ研修 (令和元年8月3日～9日、タイのバンコクやサコンナコン)

○タイ研修期間中のメモより

8月2日	道の駅にて壮行会を行った後、秋田空港へ。秋田空港－伊丹空港－関西国際空港と移動し、26時の深夜フライトでタイバンコクに向かう。
8月3日	早朝にバンコク・スワナプーム国際空港に到着。その後タクシーでモカホテルに向かい休憩。 午後は土日しか開かれていないという市場に向かい昼食をとったが、バンコクの交通渋滞の凄さに一同驚きを隠せなかった。その後、バンコクの伊勢丹デパート、タラートロットファイラチャダー (観光客用の大規模なマーケット) で晩御飯及び市場視察を行った。2チームに分かれ、古山・和泉チームは「タイの肉・魚」、佐藤・黒澤チームは「タイのお土産」をテーマに取り組んだ。後半は、高校生自身で聞いたり注文したりしてお土産を購入していた。日本にいた時から欲しがっていた魚スリッパを入手できて喜んでいる生徒もいた。帰りも渋滞に巻き込まれながらホテルに戻り各自休みをとった。
8月4日	早朝、ドンムアン空港からサコンナコン空港に移動した。ドンムアン空港ではトラベルデザインの須崎さんからの指令で、自分たちで朝食を注文して食べた。タイの辛さや酸っぱさに馴染めていない人もいるため、マクドナルドでパンケーキを注

	<p>文して食べていた。しかしながら、生徒自身が英語で注文したり対応したりと少しずつ変化の手応えを感じている。サコンナコンでは先日まで羽後町に滞在していたカセサート大学の学生達が空港で出迎えてくれ、良い雰囲気でも臨むことができた。</p> <p>午後はロビンソン、ビッグC、カフェ、寺院、インディゴマーケットを巡った。皆学生と打ち解けてきたようで、高校生と学生グループで行動したり積極的にコミュニケーションを取ったりと研修の手応えが見え始めていた。特に寺院では宗教文化について肌で感じる事ができた。夕食も学生と高校生だけのテーブルで和やかに食事をしており、確実にタイの文化に馴染んできている。</p>
8月5日	<p>カセサート大学サコンナコンキャンパスのオープニングセレモニーから5日はスタート。副学長と副町長の挨拶後、高校生1人1人が英語で自己紹介。その後、記念撮影を行い、大学のバスで広大な敷地のキャンパス内ツアーを見学した。その際、イサーン地方では乾季の水確保と赤い水分の保水力の少ない土への対策が大変だということ学んだ。その後、ロータスガーデン（蓮の公園）、タイ料理レストラン、教会（キリスト教）、日本に留学したことのあるオーナーのカフェを巡り、その後、体育館でバドミントンやバレーボールで汗を流し、リフレッシュした。また、体育館に向かう際には、激しいスコールにも直面し、熱帯地方ならではの天気の激しい変化に戸惑いを感じた。夕食はウエルカムパーティーということで、ベトナム料理で接待していただいた。日本では馴染みの無いハーブでパパイヤや肉、キュウリ、生ニンニクなどを包んで食べ、また新たな食文化と出会うことができた。サコンナコン最終日に、視察結果を英語でプレゼンすることが決まり、少しずつプレゼン準備を行いながら休みをとった。</p>
8月6日	<p>サコンナコン地域の市場に行き、その視察と朝食から6日が始まった。市場にはバッファローの皮や亀、うなぎなどを食材として提供しており驚愕する場面もあった。また、魚や鶏なども豪快に切ったり丸焼きにしたりと日本では見られない市場の雰囲気を感じる事ができた。学生に勧められ砂糖少なめのタイティーを飲んだが、とてもスッキリしていて日本人にも合いそうな感じであった。朝食でできたベトナムコーヒーなどはこの後の起業家体験プログラムにも応用できそうなので、機材も購入しておいた。朝食後はタイ王国の国家プロジェクトの施設、スタディセンターを見学。そこには、新しい農業すなわち「持続可能な農業」の実験圃場があった。ライスエリア、畜産エリア、魚エリア（池エリア）、果物エリア、植物エリアなどが敷地内にあり、外部から導入しなくてもそのエリアだけで循環できるシステムを探っているようであった。SDGsの概念は万国共通であることを認識できる良い機会になった。また、インディゴ（藍染）体験も実施し、各自、自分の模様のハンカチを作った。その後、この地域で有名な寺院も見学した。数年前までは観光客も</p>

	<p>多くはなかったらしいが、ガイドブックの影響もあり 2 年前から人が増えたとのこと。山頂からみたサコンナコンの景色素晴らしいものであった。</p> <p>夕食はお別れパーティーを兼ねてのバーベキュー。疲れもふき飛ぶ美味しさと交流ができた。戻ってきてからは、7 日朝に行うプレゼンの準備。2 チームそれぞれに羽後町のスタッフがつき、丁寧に研修内容を整理してくれた。終了後は各自洗濯などを行い、休みをとった。</p>
8 月 7 日	<p>この日は、タイ研修の報告会から始まった。タイの「お土産」と「生鮮食品」についてそれぞれ英語でスピーチした。羽後町の役場職員からのフォローもあり、何とか乗り切った 4 人。安堵の表情も束の間、別れを惜しむ間もなく、飛行機に乗り込み、バンコクに向かった。前日にはカセサートの学生からたくさんのお土産をもらい、中でもぬいぐるみはキャリーにも入りきらない大型サイズで、飛行機に持ち込めるか不安もあったが、持ち帰ることに成功した。</p> <p>バンコク到着後はカセサート大学バンコクキャンパスを訪問し、キャンパスツアーを実施。カセサート大学のメインキャンパスなだけあって、広大なキャンパスであった。サコンナコンと違い、都会の大学の雰囲気も感じられた。その後はカセサート大学付属の高校を訪問し、日本語教室で交流した。現地の生徒は日本に 2 週間から 1 年間留学経験したこともあり、日常会話は十分通用するレベルであった。しかも英語はしっかり使えるということで、語学レベルの高さを感じた。また、大学の付属小学校、中学校、高校がつながって連携したり、交換留学プログラムが発展していたりと、素晴らしいプログラムやアクティビティがここには存在していることを実感した。日本語教室の講師を務めている日本人の先生も息子を日本ではなく、バンコクの学校に入れたと言っていることから、その素晴らしさを感じ取ることができる。ホテルに戻ってからは、休憩を挟み、夕食をとって各自休みをとった。</p>
8 月 8 日	<p>ホテルをチェックアウト後、バンコクから西に 90 km 程の場所にある水上マーケットに行った。ボートに乗り、水上マーケットの地域を移動した。日本にはない文化を体験できたと同時に、この地域が観光で成り立っていることも感じる事ができた。その後、象に乗った。日本でも象に乗ることはできるが、日本以上に長時間乗る事ができ、生徒だけでなく、大人も大はしゃぎとなった。ボートにしても象にしても、終わったらすぐに写真を現像して販売するところは商売上手である。昼食後はスワンナプーム国際空港に向かい、日本への帰路についた。</p>
8 月 9 日	<p>無事、日本に入国し、関空－伊丹－秋田と移動し、無事、全行程を終えることができた。</p>

○タイ研修を振り返って

今回のタイ研修全体を通して、参加者の積極性や様々な手法でコミュニケーションを取ろうとする態度などが大きく成長したと感じた。帰りの空港で、アメリカ人と仲良くなって写真を取り合う姿などは研修前には想像できなかった姿である。また、生徒の振り返りなどを見ても、日本とは異なる文化に直接触れることで、内面に大きな変化があったことも感じられた。参加した生徒には「とりあえず取り組んでみる」とするマインドが大きく醸成されたので、今後、活躍できる場面を提供していきたい。



(2) 羽後町留学（令和元年10月、本校）

（株）トラベルデザイン主催の羽後町留学プログラムの1つにおいて、本校郷土芸能部がタイからの留学生と交流し、羽高祭で一緒に踊りを披露した。最初はぎこちなくもあったが、「踊り」という共通ツールで交流を深めることができた。本校郷土芸能部にとっても、西馬音内盆踊りを再度見つめ直す機会にもなったようだ。



(3) うごえいご（令和元年6月、道の駅うご）

教育推進協議会主催の「うごえいご」の時間において、タイの留学生と一緒に交流したり、道の駅についてプレゼンしたりするアクティビティの時間があった。講師の高橋美貴先生に補助してもらいながら交流し、留学生とのコミュニケーションにも少しずつ慣れてきた感じであった。自分の考えをしっかりと持つこと、言語化することなどの必要性を肌で感じたことと思う。



2. マレーシアとの交流

今年度は慶應義塾大学SFCの長谷部葉子准教授からの紹介もあり、「アートマイル国際協働プログラム2019」に初挑戦した。

アートマイルとは、「海外校と一緒にテーマで学習し、一枚の壁画を制作するプロジェクト」ではあるが、壁画制作以上に、協働して学ぶ過程がとても重要である。過程に力を入れて取り組むことで、①異文化を理解する力、②クリティカルシンキング、③主体的に



考える力、④多様な人々と協働する力、⑤想いを言葉や形にする力などの能力向上が期待されるプロジェクトとなっている。今年度の事業はオリンピック前の特別な年で205カ国の壁画を制作し、東京オリンピックやパラリンピックに合わせて掲示することとなっている。

初挑戦したアートマイル事業の流れは次の通りであった。

4月	メンバー募集、テーマ制定
5月	スケジュール制定、アートマイルに関する説明会
6月	SDGsに関するWS [慶應義塾大学SFCとの連携] 「SDGsアイデアブック」の英訳作業 [うごえいごとの連携]
7月	「SDGsアイデアブック」の英訳作業 [うごえいごとの連携]
8月	「東北地区 高校生SDGsセミナー」への参加 マレーシアとのオンラインミーティング①→顔合わせと挨拶 [うごえいごとの連携]
9月	マレーシアとのオンラインミーティング②→接続できず [うごえいごとの連携]
10月	アートマイルの方向性に関するミーティング
11月	マレーシアとのオンラインミーティング③→共有テーマ決め [うごえいごとの連携] 壁画制作開始
12月	壁画の完成、EMS（国際スピード郵便）でマレーシアに送付 マレーシアで受領（*税関での受け取りトラブルあり）
1月	マレーシア側で壁画制作 (以下、今後の予定)
2月	マレーシアから本校に壁画送付、アートマイル事業を通しての振り返り 本校よりジャパンアートマイル側で作品郵送
7月	東京オリンピック・パラリンピックに合わせて展示

4月の段階で、マレーシアのクアラルンプールにあるクアラカンサー大学と一緒にアートマイルプロジェクトに取りかかることが決定し、1学期はそれぞれの国において、共通テーマとして設定したSDGsの3番（すべての人に健康と福祉を）と11番（住み続けられるまちづくりを）について学習を深めた。2学期からはオンラインでの交流と考えていたが、調整がつかなかったり、コンタクトが取れなかったりなどとトラブルもあり、なかなかプロジェクトが進行できず、生徒のモチベーションも下がり気味となっていた。しかし、11月にコンタクトした際にテレグラムアプリで連絡共有することにし、お互い素早いレスポンス対応ができるようになった。そこから、モチベーションも回復し、考えの共有や絵の完成にも繋がった。

振り返ってみると、海外と連絡調整することの難しさや自分の考えをもち言語化して説明することの重要性、協働作業することの達成感と難しさなど、多くのことを学ぶ機会となった。生徒自身にとって大きな経験だったと同時に、生徒以上に、私自身にとっての成長にも繋がったと思う。今回のアートマイル事業を進める中で、クアラカンサー大学のロスマン先生やアイシャ先生、学生、文部科学省（国際言語担当）のバドルさん、一般社団法人アートマイルの方々、慶應義塾大学SFCの学生などとも繋がりを持つことができ、大きな財産となった。この繋がりや学んだ感覚などを今後の教育活動にも反映していきたい。



①慶應義塾大学生とのWS



②クアラカンサー大学生とのオンラインミーティング



③半分完成しての集合写真



④マレーシアに届きました！

3. コンゴ民主共和国と交流

慶應義塾大学生SFCから提案されたプログラムに有志メンバーが参加して交流した。お互いの国や学校について紹介し、生き方や考え方などについて考える契機にもなった。グローバル化が進んでいる現代だからこそ、色々な地域の生き方や考え方、文化に触れることの重要性に気付くことにも繋がった。この企画を提供してくれた学生に感謝したい。

4. 今後に向けて

これからの社会では、海外との関わりが増えることは必然である。10代のうちに海外に触れてその感覚を養成したりコミュニケーション能力を育んだりすることは、大きな財産になる。幸い海外と連絡調整してくれる応援隊が羽後高校の周囲にはたくさんいるので、より連携を強め、日々の教育活動に生かしていきたいと思う。

今回、私自身が国際交流の大部分に関わり、英語はもちろんのこと、改めてアクティビティの重要性に気づいた年となった。アクティビティには、非認知スキルの向上に寄与する可能性が非常に高い。より効果的なアクティビティにするには学んだことの言語化、可視化、討論などの振り返りも必要となる。周囲の教育資源を活用し、日々の生活に活力が生じるアクティビティについて、関係機関とも連携し、作り上げていきたい。